

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02704

研究課題名(和文)現代ロシア語における不定詞の文法的行動に関する体系的記述のための基礎研究

研究課題名(英文) Systematic description of grammatical behavior of infinitives in contemporary Russian

研究代表者

阿出川 修嘉 (Adegawa, Nobuyoshi)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80748088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：不定形の文法的振る舞いの観察で得られた、ある特定の動詞語彙は特定の体の形態で用いられるという、一定の偏向的選択特徴が存在するという結果を受けて、当該動詞語彙がその他の諸形態で用いられる場合の文法的振る舞いに関する観察を行った。語彙の意味と語彙のアスペクトのそれぞれの意味的類似性に着目して頻度数調査を行った結果、語彙的アスペクトの類似性に応じて、形態選択の使用も一定の類似性を示すことが明らかになった。当該文法形式の相関についての観察・記述を継続することで、動詞語彙の文法的振る舞いの予測や、また一方で当該動詞語彙の語彙的アスペクトについても記述が可能になるという可能性を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当該研究課題に取り組むことにより、言語学的記述という面からも、また言語教育の観点からも困難なカテゴリーであるとされるロシア語(ひいてはスラヴ語全般)の動詞の語彙的意味、語彙的アスペクト、またアスペクトの意味を表現する主たる形式である体のカテゴリーという、三者の間にある相互関係について、従来の断片的な記述を充実させる一助となる成果を得ることができた。また、今後動詞の意味を扱うにあたり、計量言語学的な視点からの分析の可能性及び必要性も示すものとなった。

研究成果の概要(英文)：The previous observation of the grammatical behavior of aspectual forms of indefinites showed us the existence of tendency of “biased” selection, in which certain verb lexicons are used in certain aspectual forms. Additional observations were made on the grammatical behavior when the given verb lexicons are used in various other verbal forms than infinitives. The statistics study focusing on the semantic similarities of lexical meaning and lexical aspect respectively revealed that the use of morphological selection also shows a similar tendency according to the similarity of lexical aspect. Further observation and description of the correlations between the grammatical forms and tendency in their selection would enable us to find the possibilities of predicting the grammatical behavior of verb lexicon and, on the other hand, of describing the lexical aspect of the verb vocabulary.

研究分野：言語学

キーワード：文法形式選択の偏向的特徴 体・時制形態ごとの文法形式の使用実態 偏向的特徴が保持される動詞 偏向的特徴が保持されない動詞 語彙的意味が類似した動詞語彙の体の選択傾向 語彙的アスペクトが類似した動詞語彙の体の選択傾向

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

当該研究課題に着手した時点での学術的背景として、それまで専ら意味論的な操作によって分析・記述が試みられてきたロシア語動詞の「体(たい)」のカテゴリーについて、計量言語学的観点からの調査・分析も交えた記述といったものが多くなかったという点がまず挙げられるだろう。

当該課題の研究代表者は、現代ロシア語における「可能性のモダリティ」の意味を持つ述語と不定詞(「不定形」; 以下「不定詞」)という語結合を対象にし、そこでの不定詞の体のカテゴリーの選択及び使用の実態に関する体系的記述に取り組み、その成果を博士論文として著した(cf. 阿出川 2014)。この研究は、可能性のモダリティの意味と体の形態選択の間にある相関関係に関する、先行研究における記述を再検証するという目的から出発したものだが、その再検証のプロセスの一つとして、従来の意味論的考察に加えて、それまでのアスペクト研究ではほとんど試みられてこなかった、コーパスからのデータを利用した計量言語学的側面からの記述及び分析も試みた。

そこでの記述方法の一つとして提案されたものが「体の形態的対立のスケール」(以下「スケール」)としたもので、これは、ある特定の出現環境(当該モダリティの意味を持つ述語との結合)にある動詞不定詞が、その体の形態のうち、完了体と不完了体のどちらで用いられることが多いのか、その傾向を数値の形で提示することを可能とする指標として機能する。この数式によると、完了体で用いられるケースが多い場合には「10」に近い数値を、逆に不完了体で用いられるケースが多い場合には「-10」に近い数値を示し、これにより不定詞の体の選択における偏向的な特徴を数値化し、動詞を特徴付けることができる。「スケール」の示すこの値が示唆することは、不定詞という、当該動作が時間軸上にまだ位置付けられていない、概念化されたままの抽象的なレベルにおいて、母語話者がその動作をどのようなアスペクトの性質を持つものとして認識し捉えているのかということが言語形式に反映されているものであると考えられる。

このような示唆は、ある文法的カテゴリーを基準として、計量的な観点も考慮に入れた上でデータを整理した結果初めて得られたものであり、これは、従来の動詞アスペクト研究において中心的なアプローチであった、意味論的観点からの記述・分析だけでは明らかにできなかった点であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究課題では、このような動詞不定詞の体の形態選択の偏向的特徴の有無に関する調査を、対象を拡大した上で実施することが当初の目的として掲げられていた。すなわち、博士論文で対象となっていた、可能性のモダリティの意味を表す述語と不定詞からなる語結合という単位から、不定詞の「接語的用法」及び「非接語的用法」を対象を更に広げ、不定詞の体の形態選択の実態とその用法についての分析を進め、その文法的行動を上述の「スケール」を利用して特徴付けることを目指していた。具体的には、それぞれの用法について、体の形態選択に関する実態の調査と記述、また選択に際しての偏向的傾向の有無の検証、もし何らかの偏向的傾向が認められるのであればその記述を進めるといった点が念頭に置かれていた。

また、そこでは同時に、この「スケール」という指標の有効性についての検証作業についても取り組むことも含まれていた。

しかしながら、内的・外的双方の要因により、当初の予定よりも調査の対象を絞り込むことを余儀なくされ、上述の「接語的用法」を主たる対象として絞り込み調査などを試みると同時に、体のカテゴリーの形態選択の偏向的特徴を記述するという作業の一環で、不定詞以外の動詞の諸形態の形態選択の実態についても調査を行うこととなった。

また、調査・分析の途上、計量言語学的なアプローチ以外にも、他の要素も改めて考慮に入れていく必要性を認識したため、当初含めていなかったアプローチについても援用・試行する必要が生じたため、本研究が目指していた所記の方向性を修正することとなった。

当初観察されていた、可能性のモダリティの意味を表す述語と不定詞の語結合のケースにおいて、不定詞の体の形態選択に際して、特定の偏向的選択特徴を見せている動詞語彙をリストアップし、それらの動詞語彙が、それ以外の使用環境において、どのように形態選択されているかについてまず調べることにし、全体的な傾向の把握を試みた。これによって、当該動詞語彙が示す傾向が、特定の語結合において観察されるものなのか否かについての検証が可能になる。

また、これらの動詞語彙の意味的類似性が、どのように体の形態選択に影響を与えているかについても分析を試みた。

3. 研究の方法

(1) サンプルの収集

上記の調査、課題の解決に向けて、阿出川(2019)においては、まず試みに、ロシア語ナショ

ナル・コーパス (Национальный корпус русского языка; ラテン文字翻字形 Natsional'nyĭ korpus russkogo ĭazyka) からのサンプル収集を行った。従来主にデータの収集元にしてきたウプサラ・コーパスよりも語数が多く、ある程度の安定した出力結果が得られるコーパスとして現状では最良の選択肢であると判断し、当該コーパスからのサンプルを採用した。

サンプル収集に際しては、検索時に各種パラメーターには手を触れず、デフォルトの状態(したがってナショナル・コーパスに内包されているコーパスのうち、「基本コーパス」が収集先となる)で文字列検索を実施した。

なお、代表者以外の作業従事者の確保が、当初想定とは異なり諸般の事情により叶わなかったこともあり、大規模なサンプルの収集には着手できず、極めて限定的なものとなった。その意味では計量言語学的側面からの考察についても、当初の想定に比して全く不十分なものとなってしまった面は否めない。

(2) 体の形態選択、動詞語彙との関係についての調査

まず、阿出川(2014)の時点で課題として残されていた、以下のそれぞれの点について調査を順次行っていくこととした。

当該動詞語彙が見せる選択傾向は、当該動詞語彙が不定形で用いられるあらゆる統語環境において同様の選択傾向が観察されるのか

当該動詞語彙が見せる選択傾向は、不定形以外の場合の動詞形態の場合でも、同様の偏向的な選択傾向が観察されるのか

当該動詞語彙が見せる選択傾向は、意味的に類似した他の動詞語彙でも同様に観察されるのか

上記 について、当該選択傾向が、不定形が可能性のモダリティの意味を含む述語と語結合をなす場合にのみ観察されるものなのか、それとも特定の述語との結合以外の使用環境であっても、不定形という形態で用いられるのであれば同様の傾向を示すのかどうかの検証が必要となる。これによって、「可能性のモダリティの意味を含む述語と語結合をなす場合に一方の体の形態が選択される動詞語彙」と「不定形で用いられる場合に一方の体の形態が選択される動詞語彙」という特徴づけが可能になるだろう。これにより、当該動詞語彙の見せる選択傾向が不定形という形態で用いられる場合に特有のものなのか、あるいは他の意味的要因の影響を受けた場合にたまたまそのような特徴を見せているのかという、その判断のための示唆が得られると考えられる。

同じく上記 について、当該動詞語彙の見せる選択傾向が、それらの動詞が不定形以外の動詞形態の場合でも同様に観察されるのかの検証が必要となるだろう。これにより、上の二つの特徴づけに加えて、「出現環境にかかわらずそもそも一方の体の形態が選択される動詞語彙」という特徴づけが可能になるだろう。

上記のうち、まず 及び について、阿出川(2014)において「スケール」の示す値が10だった動詞語彙を対象として調査を実施した(cf. 阿出川2019)。

当該動詞語彙の不定形が用いられる際の、統語環境の制限を取り除いた場合の純粋な出現頻度数の調査

当該動詞語彙が、不定形以外の動詞形態で用いられている場合の使用実態の調査

上述の の調査により、当該動詞語彙の不定形が用いられる場合の、統語環境における差異を一切考慮しない場合の、体の形態選択の実態についての調査を行い、阿出川(2014)での調査において観察された、体の形態選択の傾向と照らし合わせることが可能になり、統語環境の制限が体の形態選択に与える影響の有無について検討が可能になった。その上で、上述 の調査により、当該動詞語彙の使用実態と体の形態の選択傾向について明らかにした。

これらの結果を踏まえた上で、上記 の課題を解決するべく以下の上記 の課題に対応する調査を行った。すなわち、あるひとつの動詞語彙に限った傾向ではなく、類似の意味を持つ他の動詞語彙の場合にも同様な傾向が観察されるのかの検証である。これは、何らかの共通の意味要素を内在していれば、双方類似した用いられ方がされるであろうという想定のもとにその可能性を探るものである。

4. 研究成果

(1) 主たる研究成果

今回調査・分析の作業を進めていく上で、感染症流行などの外的要因により、またその他内的な要因によっても、当初想定していたエフォートの割合が年度を追うごとに削られてしまったこと、また各種作業の補助を任せられる人材が諸般の事情により確保できなかったことなどが大きく影響し、本研究課題に着手した当初に設定していた到達目標や、研究全体の方向性の修正を迫られたことにより、ごく一側面のみ調査・観察に留まることとなった。しかしながら、こうした種々の制限はあったものの、上記のように新たに設定された課題の解決を試みるべく調査を行った結果、以下に示すような一定の研究成果、また今後の展望が得られ、これから類似の

研究課題に取り組む上での展望も得られたものとする。

まず、特定の出現環境（統語環境）において、特定の動詞語彙が見せる体の形態選択の偏向的選択特徴について、その選択特徴が、出現環境の影響のもとに観察されるものなのか、あるいはそうした影響とは関係なく同様の選択特徴が観察されるのかどうか、という点については次のようにまとめることができるだろう。

まず、不定詞の形態で用いられる場合について調査したところ、出現環境の別に関わりなく、同様の偏向的選択特徴が引き続き観察されるタイプの動詞語彙と、スケールの示す値が大きく変化するタイプの動詞語彙とに分類することが可能となった。

このうち、前者の動詞語彙、すなわち不定形という形態で用いられる場合には、その出現環境の別に関わりなく、一貫して偏向的選択特徴を見せる動詞語彙（«оказываться / оказаться» 及び «случаться / случиться»）については、更に、他の諸形態で用いられる場合にどのような選択傾向が観察されるかについて調査を行った。その結果、これらの動詞語彙はそれぞれ形態選択の傾向が時制形態に応じて異なっていることが明らかになった。

また、動詞語彙の意味的類似性による振る舞いの違いについても観察を試みた。

「語彙の意味が類義的で、語彙的アスペクトも同一」（例：«происходить / произойти» vs. «осуществляться / осуществиться»）、「語彙の意味が類義的だが、語彙的アスペクトは異なる」（同：«случаться / случиться» vs. «происходить / произойти»）、「語彙の意味は異なるが、語彙的アスペクトは同一」（同：«приходить / прийти» vs. «замечать / заметить»）、「語彙の意味が異なり、語彙的アスペクトも異なる」（同：«происходить / произойти» vs. «замечать / заметить»）という4つのパターンについて、動詞語彙の使用実態について比較を行った。

その結果、語彙の意味が類似する動詞語彙であれば、非過去形及び мочь (moch') との語結合のケースにおいて使用上の類似が認められた。

一方、語彙的アスペクトの類似性が与えられられる影響は、Vendler (1967) によるいわゆる「語彙的アスペクト (lexical aspect)」の分類における、「達成」と「到達」のそれぞれのタイプに応じて、異なる傾向が観察された。「達成」タイプの語彙的アスペクトの意味を有する動詞語彙では、非過去形の場合に形態選択の類似性が観察されるのに対して、「到達」タイプの動詞語彙の場合には、過去形、不定形及び мочь (moch') との語結合の場合に類似の傾向を示した。

このことは、今度は逆に、動詞語彙の体の形態の使用実態（選択傾向）から、当該動詞語彙の語彙的アスペクトの別がある程度まで予測できるということになる。これは今回の調査の結果によって得られた新たな示唆であると捉えてよいだろう。従来行われてきたような、コロケーションによる語彙的アスペクトの別による振る舞いの違いに加えて、形態選択傾向の違いによっても、語彙的アスペクトの特徴づけが可能になるということになる。

このように、体の形態選択において一定の偏向的選択特徴を見せる動詞語彙における、語彙的意味の類似性による文法的振る舞いへの影響が認められたことは成果として挙げてよいだろう。

(2) 副次的に得られた研究成果：異なる視点からの対象へのアプローチ

また、一方で、他の要素も考慮に入れた上で、改めて分析対象を見直す必要があることを認識することとなったが、これは副次的な研究成果と位置付けてよいだろう。

まず、語用論的観点からの記述を一層充実させるという必要性である。従来行われてきたような、意味論的側面からの記述ばかりではなく、発話の性質を考慮した語用論的側面からの記述の必要性も再認識し、その観点から改めて体のカテゴリーの意味・用法について分析を試みた (cf. 阿出川 2021)。

また、一般言語学的視座に立った場合のロシア語の体のカテゴリーの再検討の必要性についても改めて認識するに至った。これにより、ロシア語の体のカテゴリーが言語体系内で担っている意味・機能について、その位置付けを再考することが可能になる。従来ロシア語をはじめとしたスラヴ諸語という枠組み内で取り扱われてきた同カテゴリーを、通言語的な視点から捉え直した場合に、純粋に文法的意味としてのアスペクトの意味を表示する言語形式としての役割と、それだけでは説明しきれない意味・用法を言語形式として表示するという体のカテゴリーの言語体系内における様々な機能を整理し、記述を行なっていくための基礎となる作業を行なった (cf. 阿出川 2022)。

5. 引用文献など

阿出川修嘉『現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察：可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について』東京外国語大学博士論文(博甲186号) 2014年。

——『不定形の文法的振る舞いの記述のための覚え書：体の形態的対立のスケールの再検証に向けた研究ノート』スラヴ文化研究 (Vol. 16, 2018) pp. 88-100, 2019年。

——『ロシア語動詞の体・時制形態の選択実態に関する覚え書：動詞語彙の意味的な類似性に応じた文法的振る舞いについて』(『ロシア語研究』第30号(2020) pp. 131-154, 2021年。

——『現代ロシア語の命令法における体の用法についての覚え書：言語行為理論を援用した Рассудова (1982) における記述の再解釈の試み』上智大学外国語学部紀要 No. 55 (2020) pp. 37-62, 2021年。

—————(2022)『ロシア語動詞の体の個別の意味とアスペクトの意味の対応関係に関する再整理の試み』上智大学外国語学部紀要 No. 57 (2022) pp. 21-46、2023 年。
Vendler, Zeno, *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press, 1967.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 阿出川 修嘉	4. 巻 30
2. 論文標題 ロシア語動詞の体・時制形態の選択実態に関する覚え書：動詞語彙の意味的な類似性に応じた文法的振る舞いについて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ロシア語研究	6. 最初と最後の頁 131-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿出川 修嘉	4. 巻 55
2. 論文標題 現代ロシア語の命令法における体の用法についての覚え書 言語行為理論を援用した（1982）における 記述の再解釈の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上智大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 37-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿出川修嘉	4. 巻 16
2. 論文標題 不定形の文法的振る舞いの記述のための覚え書：体の形態的対立のスケールの再検証に向けた研究ノート	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スラヴ文化研究	6. 最初と最後の頁 88-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿出川 修嘉	4. 巻 40
2. 論文標題 ロシア語テキストへのメタ情報タグ付与に関する一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神奈川大学言語研究	6. 最初と最後の頁 153-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阿出川修嘉	4. 巻 57
2. 論文標題 ロシア語動詞の体の個別的意味とアスペクトの意味の対応関係に関する再整理の試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 上智大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 21-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 阿出川修嘉
2. 発表標題 現代ロシア語における体のカテゴリーの文法的振る舞いに関する一考察 類義的動詞の体のカテゴリーの選択傾向について
3. 学会等名 日本ロシア文学会2019年度 (第69回) 全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------